

チール写真に記録することができる。4. 拡大された粘膜像が得られ、微細病変の診断に威力を発揮することなどが上げられる。

24. 食道癌に対する Eosin Yellow を用いた Photodynamic diagnosis の検討

(筑波大学臨床医学系外科)

渋谷 進・高瀬 靖広・
辻 勝久・岩崎 洋治

Eosin Yellow (eosin Y) と argon laser 光線を組合わせた肉眼診断法“photodynamic diagnosis”(PDD)が食道癌に応用できるか否かを検討した。対象は扁平上皮癌である食道癌12例である。方法は手術12および48時間前に eosin Y を10mg/kg 点滴静注し、argon laser 光線を摘出標本の癌腫、外膜、転移および非転移リンパ節、および脂肪組織に照射して蛍光の観察を行った。その結果、癌腫の蛍光は全例にみられ、外膜ではみられなかった。転移リンパ節の蛍光はほとんどの症例にみられた。非転移リンパ節と脂肪組織の蛍光は手術48時間前に投与した症例でみられないが、12時間前ではみられるものがあった。以上より、手術48時間前に eosin Y を投与する PDD は臨床的に応用可能であると思われた。

25. 当院の検診で発見された悪性腫瘍の臨床的検討

(社会保険山梨病院内科)

田中 俊夫・広瀬 寿文・小沢みや子・
茂木茂登子・中沢 肇・田辺 誠・
矢川 孝子・長谷川みち代・大谷 智子・
小松 達司・川村 雅枝・前田 淳・
井口 孝伯・飯田 龍一

(同外科)

新井田正枝・松山 秀樹・山下由起子・
立花 早苗・久米川 啓・矢川 彰治・
小沢 俊総・草野 佐

(同病理)

小俣 好作

社会保険山梨病院健康管理センターに昭和58年4月より昭和60年11月までの間に、成人病検診、1日ドック、2日ドックとして26,731名が受診し、187例の悪性腫瘍が発見された。その内訳は、甲状腺癌102例と最も多く、以下胃癌47例(早期癌38例)、大腸癌13例(早期癌2例)、子宮癌6例、肝癌4例、腎癌4例、脳腫瘍3例、肺癌2例、肝管癌2例、胃肉腫1例、白血病1例であった。

26. 胃癌切除例における10年生存例の検討

(防府胃腸病院)

島村 嘉一・三浦 修・南園 義一・
長崎 進・戸田 智博

(山口県立中央病院中央検査部病理)

亀井 敏昭

「昭和39年8月より昭和50年12月までの切除例」

	切除数	10年生存例	粗生存率
早期胃癌	144例	99例	76%
進行胃癌	365例	82例	25%
合計	509例	181例	39%

症理組織学的深達度を中心に181例のうち176例を検索可能例とした。

1. 早期胃癌生存例で腫瘍径が6cm以上のものは表層拡大型であった。

2. 組織型は未分化型が最多で、早期胃癌例では分化型と未分化型が同数ぐらい。進行胃癌例では未分化型が多かった。

3. 深達度が進むにつれ脈管侵襲は強くなっている。

27. 当院における虚血性大腸炎症例の検討

(川崎胃腸病院)

大森 尚文・戸田 一寿・山内 大三・
清水 泉・松尾 成久

(聖マリアンナ医大第二外科) 生沢 啓芳

川崎胃腸病院におけるS. 54. 1~S. 60. 12迄の虚血性大腸炎症例は17例あり、その間の大腸炎症性疾患105例の16%に当り、年は増加の傾向にある。年齢分布は60歳台、50歳台、40歳台と高齢者に多いが、20歳の症例も経験している。占居部位は下行結腸のみは6例あり、17例中16例は下行結腸を含んでおり、一番の好発部位は下行結腸であり、好発部位といわれる脾曲部は17例中5例にすぎなかった。

症例はすべて Transiert Type であり、主訴としては下血、腹痛、下痢の3大症状の他に、便秘、発熱、嘔気嘔吐などがあり、併存疾患としては、高血圧症、心疾患、高脂血症が大半を占めていた。成因としては、血管病変によるのみならず、腸管側の因子、血流等も関与しているのではないかと思われた。

28. 乳房切断術における二、三の工夫

(谷津保健病院外科)

延島 茂人・御子柴幸夫・糟谷 忍